初めてカメラ持ってパチリ

―難民キャンプで暮らすビルマのカレン族―

「自由に写真を撮ってね」。そう言われて、生まれて初めてカメラを持った子供たち5人は、緊張感で顔がこわばっていました。テレビや新聞、ましてやプリクラなんてないジャングルの中で生活しているから無理もありません。ここは、外の世界とつながりは、短波ラジオだけが頼りというところです。

タイとビルマ（ミャンマー）の国境には、ビルマ国内の戦争から逃げてきた人たちが作り上げた「難民キャンプ」がたくさんあります。そこには、およそ十万人のカレン民族の人たちが、不便な暮らしを続けている。

難民キャンプは、町に近い所にも、そうでないところにもあります。私は、最も山奥にある難民キャンプを毎年訪れ、そこで生きる人たちの生活を撮影しつづけています。

ある日、私の泊まっている家にリリポーという十五歳の女の子が、英語を話すおばさんと一緒にやってきました。リリポーは、カメラを渡した子どものうちの一人です。

突然の訪問に、私はびっくりしました。恥ずかしがりやの多いカレンの子どもには珍しいことだからです。

リリポーは早速、おばさんを通して日本のことをたずね始めました。

「日本の子どもたちは、学校ではどんなことを勉強しているの。何をして遊んでいるの」。好奇心いっぱいです。

日本から持っていった写真を見せると、その写真に食い入るように見入っていました。そこには日本の子どもたちの遠足風景が写っていたからです。

ロウソクの光のもと、リリポーとの話は、夜遅くまで続きました。

＜写真キャプション＞

・算数の勉強はどこでも同じ？　ネズミの絵を使って数の勉強。

・主食は日本と同じようにお米のごはんです。

・十四歳のエピーが撮影した、「学校の友だち」

・青空の下、ゾウとお散歩